

Infolettre de l'AJEQ

Association japonaise des études québécoises

日本ケベック学会ニュースレター

2023年 夏季号

第14巻第1号 (通算36号)

2023年10月5日発行

2023年度 AJEQ全国大会に向けて

杉原 賢彦 (目白大学)

日本ケベック学会 2023 年度大会は、順調な滑り出しを見せた。年度が変わる前に「先住民イヌーとアイヌの文学・文化的対話」というテーマが確定し、作家で詩人でもあるジョゼフィーヌ・バコンさんを招聘し、基調講演をお願いする。加えて、小倉和子顧問と河野美奈子先生の翻訳による『北方の想像界とは何か? 倫理上の原則』のダニエル・シャルチエ先生をお呼びしてシンポジウムに登壇いただく。あとは、日本側での対応をどうするか? (編集人注:残念ながら、シャルチエ先生の来日はキャンセルされました。)

この企画の背景には、土橋芳美さんによる『痛みのペンリウクー囚われのアイヌ人骨』が、昨年、フランス語に翻訳・出版されたという誘因があった(翻訳は、AJEQ 会員のエチエンヌ・ローウ=ジョバンさんによる)。イヌーとアイヌ、ふたつの文学が交わるところがあるのだろうか? そんなところから企画は出発していたのだと察する。企画委員会のなかには、イヌーとアイヌをテーマにすること自体が政治的ジェスチャーを要するものであり、このテーマは難しいのではないかという意見もあったが、

AJEQ 会員が関係する翻訳物に目を向けるという意味でも、またこれまで取り扱ったことがないテーマという点でも、掲げる価値のあるテーマとしてゴー・サインが出たのだった。

だが、こうしてすんなりプログラムが決定し、安心していただけの間のことだった。肝心要のジョゼフィーヌ・バコンさんとのファースト・コンタクトがうまくゆかず。シャルチエ先生からの助言もあり、バコンさんを諦め、同じく先住民であり、アティカメク族の戯曲家ヴェロニク・バジール・エベールさんを第2候補とする代案が浮かび上がった。このとき6月。シンポジウムの概要も決定し、テーマも「日本とケベックにおける先住民の文学・文化的対話」と変更され、これで安心のはずだった。

やがて夏休みが近づくのだが、カナダでは猛暑下に山火事が相次いでおり、その渦中でエベールさんも避難を余儀なくされていたらしかった……。

やがて8月も過ぎつつあるころ、企画委員会を揺るがす事態が発生する。エベールさんとまったく連絡が取れないのだ。このままエベールさんからの返事を待つか、そ

●本号の内容●

AJEQ 全国大会に向けて… 1

寄稿:『痛みのペンリウクー囚われのアイヌ人骨』

フランス語訳出版に際して… 3

リレー連載「ケベックと私」… 5

ACEQ 大会参加報告… 7

小畑賞調査報告①… 7

小畑賞参加報告②… 9

編集後記… 12

れとも基調講演を変更するか？企画のコーディネーターである小倉和子顧問を中心にして企画委員会内で話し合いを持つが（その間、小倉顧問はシャルチエ先生とも話し合っていた）、最終的にどうするかを決定するまでの期日は 1 週間もない……。

こうして、眠れようもない日々が続くなかで、最終的に基調講演をなくし、シンポジウム枠を拡大するという決定が苦慮の末、なされたのだった。

だが、それ以外の部分では順調に準備は進んでいった。コロナ禍の退潮のおかげもあり、今年度は昨年が続いて対面開催が可能となったことはもちろん、4 年ぶりとなる懇親会も再開される予定となっている。なにより、シンポジウムの原義は、酒を酌み交わして談論することでもある。その意味で、大会の会場となる聖心女子大はうってつけの場所だろう。

瀟洒な宮代ホールのたたずまい、そして懇親会会場となるレストラン「La Mensa Jasmin」も歓談の場としてふさわしい。ぜひ久方ぶりの大会をフルに満喫いただければと思う。（編集人注：会場や懇親会の場所も急遽変更となりました。）

その大会の内容だが、開会は 10 時からとなる。残念ながらビデオ・メッセージのみとなるケベック州政府在日事務所のシェニエ・ラ=サール代表によるあいさつを挟んだのち、10 時 15 分より午前の部「自由論題」へ。今年は、3 組の発表があるが、ケベック研究の奥深さ、さまざまな観点を体験

いただけるはずだ。

お昼休みののち、午後の部へ。ここ数年、ランチタイム・トークで軽い話題を供してきたが、今年はこのランチタイム・トークを取りやめ、ゆっくり昼食を楽しんでいただけるようになった。

午後の部の最初は、AJEQ の設立 15 周年を写真とともに祝う「学会設立 15 周年記念企画 アルバム紹介、書誌紹介」。加藤晋会員と村石麻子会員のおふたりにより、AJEQ のここまでの歩みを概観していただけるはずだ。

そしてメイン・プログラムとなるシンポジウム「日本とケベックにおける先住民の文学・文化的対話」へ。コーディネーターを務められた小倉和子顧問の先導により、3 人の登壇者による報告がなされる。その最初は、ダニエル・シャルチエ先生 (UQAM) の「Les représentations littéraires des Autochtones au Québec」、次いでジェフ・ゲーマン先生 (北海道大学)「世論を形成し、アイヌの状況を改善するための手段としてのアイヌ文学、アート、パフォーマンスの課題と可能性」、そして河野美奈子先生 (立教大学)「『北方の想像界』からみた『Nutshimit』と『アイヌモシリ』」となっている。

北方の先住民とその文学あるいは文化的活動を知ってゆく絶好の機会となるのではないか。そしてもちろん、4 年ぶりにフル開催となる 2023 年度 AJEQ 全国大会を満喫いただければと思う。



<寄稿>

『痛みのペンリウク：囚われのアイヌ人骨』
フランス語訳出版に際して

河野美奈子 (立教大学)

アイヌの作家土橋芳美による『痛みのペンリウク：囚われのアイヌ人骨』(以下『痛みのペンリウク』)がエチエンヌ・ローウ＝ジョバン (AJEQ 会員) の翻訳により *Penriuk et sa douleur : Ossements aïnous retenus prisonniers* (以下 *Penriuk et sa douleur*) と題されて 2023 年 2 月にカナダで出版された。『痛みのペンリウク』は、作者の先祖であるペンリウクの骨が北海道大学の納骨堂に収められていることを作者が知ることから始まる。ペンリウクは、北海道の平取(ピラトリ)アイヌの首長であり、多くの同胞たちから尊敬を集めていた人物である。「研究のため」という名目のもと遺骨の収集は明治期の 1874 年から始まり 1944 年までおこなわれた。現在、個体ごとに特定できた遺骨だけを計数しても 1574 体の遺骨が 12 の大学で保管されている(文部科学省、「大学等におけるアイヌの人々の遺骨の保管状況の再調査結果」2019 年 4 月より)。ペンリウクの遺骨は土橋による返還

要求がおこなわれたが、現在でも返還には至っていない。自身の先祖が土から掘り起こされ、現在でも「ピラトリ 1 号」として標本のように扱われていることに衝撃を受けた作者は、ある時からペンリウクの声が聞きこえるようになり、彼の代弁者として『痛みのペンリウク』を執筆することになった。『痛みのペンリウク』では自らの骨が掘り起こされ、納骨堂に収められることになった経緯をペンリウクが語る構成となっている。彼は子孫である作者(作品のなかでは「芳美」と呼びかけられる)に語りかけ、北海道大学での「対面」では彼女との対話を実現する。遺骨の盗掘という悲劇に端を発しながらも、本書は序文を書いた花崎皋平が示す通りアイヌの首長ペンリウクの人生が描かれた長編叙事詩となっている。

『痛みのペンリウク』がフランス語へと翻訳されるきっかけとなったのは、2020 年、ケベック大学モンレアル校のダニエル・シャルティエと土橋芳美との北海道での出会いがきっかけである。彼は *Penriuk et sa douleur* の「紹介文」を書いている。ケベックのファースト・ネーションズやイヌイトの文学を中心に研究しているシャルティエは、北海道大学のジェフリー・ゲーマンの仲介で土橋と対面を果たした。彼は土橋による『痛みのペンリウク』の朗読を聞き、すぐさまフランス語への翻訳を熱望した。そして彼の北海道行きに同行し、その場で通訳もおこなっていたエチエンヌ・ローウ＝ジョバンが翻訳を担当することになった。

ダニエル・シャルティエがなぜここまで彼女の作品に惹かれたのかは、まず作品自体の素晴らしさもあるが、*Penriuk et sa douleur* の「紹介文」にも書かれているとおり、ケベックの先住民であるイヌーの詩人ジョゼフィーヌ・バコンの作品と多くの共通点が見出されたからである。『痛みのペンリウク』を聞きダニエル・シャルティエは以下のように記している。

土橋芳美のいる世界から数千キロ離れたニタシナンのただなかにいるジョゼフィーヌ・バコンの詩的な声が聞こえてくる。バコンは土橋にいわば呼応している。2 人の作家とも不安定でありながら希望に満ちており、各々の言葉で書いている。翻訳だけが彼女たちの言葉同士をつなげ、彼女たちの世界のヴィジョンをつなげることができた。

(*Penriuk et sa douleur*, p. 3.)

ニタシナンはイヌーのことばで「わたしたちの大地」を意味する。イヌーの人々はかつてサンローラン川沿いの土地を移動しながら暮らしており、現在の居留地も川の流域に点在している。北海道とケベックとに離れてはいるが、彼女たちは北の大地に生き、ともに植民地支配のトラウマを抱えながら、詩作を通して祖先の記憶を辿ろうと試みている点でつながっているのである。そして、土橋は日本語で、バコンはフランス語とイヌー語の 2 言語併記で詩を書いている。彼女たちの作品を翻訳することは、著者同士はもちろんのこと、とりわけ日本語とフランス語話者の読者にとって、両作品を理解するためには必要であると考えたのである。その点では、今後バコンを初め

としたケベックの先住民の作品の日本語訳の出版は必須になるだろう。バコンの処女作『メッセージ棒』(*Bâtons à message*, 2009) では、カナダの同化政策により絶たれてしまった祖先の記憶や神聖視されている大地や動物が描かれ、イヌーが再び彼らの地に集まることを呼びかけられている。

『痛みのペンリウク』ではペンリウクの声で、『メッセージ棒』では作者が投影された者の声でそれぞれの民族の痛みが訴えられていると同時に、祖先の記憶を「語り継ぐこと」が必要とされ、個人の体験から民族全体の未来を指し示すという点が共通している。

以上のような経緯から『痛みのペンリウク』のフランス語版の翻訳が始まった。*Penriuk et sa douleur* 作成には、まずダニエル・シャルティエの熱意と 2 人を引き合わせたジェフリー・ゲーマン、本書にアイヌ民族の歴史と文学についての年表を書いたアイヌ研究者のリュシアン＝ロラン・クレルクとそれに協力した仏文学者の桜井典夫、翻訳者の博論の指導にあたり、翻訳でも訳者に様々な助言をした立教大学の小倉和子 (AJEQ 会員)、と多くの協力者の尽力が重要だった。そして何よりも訳者のエチエンヌ・ローウ＝ジョバンの貢献がなければ実現できなかつただろう。翻訳をはじめ、ケベック映画を専門としている訳者は日本語に精通しているのはもちろんのことだが、アイヌ語には注意書きを丁寧に示し、フランス語の読者がアイヌ文化をそして何より

も『痛みのペンリウク』の世界をより理解できるような工夫が随所に施している。『痛みのペンリウク』には大学からの文書なども差し込まれており、その背景を知るために多大な労力を費やしたことは想像に難くない。あらためて訳者に最大の賛辞を送りたい。



〈リレー連載「ケベックと私」第 10 回〉

佐々木菜緒 (白百合女子大学非常勤講師)

ケベックは、どの視点から見ているかによって多様な相を呈するところである。たとえば、経済や文化の中心地であるモンREALに目を向けているのか、それとも政治の中心であるケベック市を頭に浮かべているのか。多様な文化・言語が活発に交錯する生活圏で、公共交通網が発達している都会を考えているのか、それとも概してフランス系文化の生活圏で、移動には車が必要な田舎、地方を想定しているのか。あるいは、近年の動向をふまれば、そこに先住民居留地の視点が必然的に加わるだろう。こうした状況はケベックだけに限らず北米大陸の他地域にも当てはまることであるが、フランス語を中心にしつつ、複数の言語文化を基に多元的社会が形成されてきたケベ

ックはとくに、恩師小畑精和先生の表現を借りれば、万華鏡の如し、である。ケベックという土地が様々な視線のもとに意味を変えてきた場所であるように、私にとってのケベックもその時々に関心や研究テーマによって姿が変わってきた。その変化は、1) モンREAL、2) ガブリエル・ロワ、3) アンヌ・エベール、4) イヴ・テリオール、以上の 4 段階に分けられる。本稿では、この 4 つの視線のなかで私が親しんだケベックについて述べてみたい。

私にとって最初のケベックは、学部時代 (2000 年代) に 1 年間休学して暮らしたモンREALである。そのとき、それなりの都会空間であるにもかかわらず、科学技術の進歩と折り合いをつけながら暮らしているモンREAL人の行き様が強く印象に残っている。当時、日本では携帯電話が普及し、個人がパソコンを持ちはじめた時期である。対し、モンREALでは基本固定電話、パソコン (インターネット) はネットカフェという具合だった。単純に比較すれば日本より「遅れている」ということになるかもしれないが、私には、「足るを知る」生き方に映った。科学技術を取り入れながら、個人間の交流が密室化されず、他者との関わりの中でなされていると。豊かな暮らしはお互いの空間を共有することなのだろうと。そして、私が最初の研究対象としてガブリエル・ロワに興味をもったのはこの経験と結びついている。

私にとってロワはまず進歩の意味を問う

た作家である。それは彼女自身が、社会様式や科学技術が大きく発展した 20 世紀社会の真っ只中で、都会から地方へ、東から西へ、南から北へ様々なカナダ・ケベックの相に触れてきたことがあるだろう。その意味で、戦後の高度経済成長期のモンREAL社会の世知辛さを描いた『アレクサンドル・シュヌヴェール』(1950) や、ケベック北部フォール・シモ(現クジュジュアック)のイヌイト社会における白人文明への葛藤を語った『休息なき川』(1970) はロワを代表する作品であり、昨今の社会情勢やケベック研究の動向をふまえれば、もっと注目に値する作品である。いずれにせよ、ロワが描き出すカナダ・ケベックの地域とそこに生きる人々の暮らしによって、私のケベック風景地図は彩り形づくられた。

私にとって次のケベックは、アンヌ・エベールが描く伝統的カトリック社会と、その対極にある野性的な自然風景である。ロワとエベールはほぼ同時代に生きた作家であるけれども、お互いに出自も作風も扱う主題も異なるため、接点は薄い。しかし、カナダ・ケベックの広漠たる平地、人里離れた森や山地、雪景色に棲まわる圧倒的な孤独に惹かれている点は共通する。とくにエベールにおいては、「激流」(1950) や『カムラスカ』(1970)、『シロカツオドリ』(1982) が象徴するように、人間の深淵にある膨大なエネルギーや情念が、強大無比の自然環境と一体化して爆発する。敵対するものでも賛美の対象でもなく、人間の一部として

エベールが描くケベックの自然風景を通して、私のケベックは詩情に満ちた空間になった。

そして、私にとって現在のケベックは、イヴ・テリオールの物語に登場するユダヤ人や先住民、イヌイトといった、フランス系を中心としたケベック社会での他者像とつながっている。ケベック社会における様々な周縁者についてはロワもエベールも強く関心に向けて、ケベック社会文化の構成要素として重視した作家であるが、テリオールの場合は当初から自ら周縁者である。『アーロン』(1954) と『アガグック』(1958)、『アシニ』(1960) がその代表作である。これは単純に彼が外に目を向けたというのではなく、フランス系も周縁者も等しく抱える、北米大陸の一地域であるケベックに生きる者としての人間条件を取り出し、共有しようとしたのではないかと考えられる。

他二人の作家と比べて、テリオール研究は未だ十分に開拓されているとはいえない分野であり、大きな可能性を秘めている。テリオールの作品を通じて、私にとってのケベックが今後どのように変化していくのかを楽しみに、研究に邁進したい。



〈2022 年度韓国ケベック学会参加報告〉

Jean Philippe-Croteau (東京外国語大学)

韓国ケベック学会 (ACEQ) 大会は盛会のもとに終わりました。企画者である ACEQ メンバーの方々にも大いに歓待を受けました。

学会での発表に際しては、多くの参加者の方々に興味を持っていただきました。特にヌーヴェル・フランスの歴史意識や、ケベックとフランス語圏オンタリオの若者たちにおける過去への関係の比較という点についてです。ケベック州以外にいるフランス語話者たちのおかれたマイノリティとしての状況については、聴衆にはあまり知られていないように感じました。また、皆さんは今回の調査規模の大きさについても驚かれているようでした (13 の学校において 635 名の生徒が参加した調査でした)。幾度もお褒めの言葉をいただいたことを覚えております。

聴衆の方々からの質問は少ないものでしたが、それは代表の方より 4 つの質問をいただき、そのために質疑応答の時間が一杯となってしまったためです。

オンライン開催の学会ということによる制約はあったものの、今回の参加は非常に豊かで刺激的な経験であったと言えます。

今回 ACEQ 学会が再開されたことについてとても喜ばしく思っております。

(フランス語から編集人翻訳)



〈小畑賞調査報告① : 2020 年度受賞者〉

「2 月のケベックとモンリアル、
そしてトロント」
片山幹生 (早稲田大学)

小畑ケベック研究奨励賞に応募したのは 2020 年だった。研究プロジェクト名は「ポスト・新型コロナ禍のケベック演劇」である。新型コロナが全世界的に感染拡大したのはこの年の 2 月のことだった。小畑ケベック研究奨励賞の応募書類を提出したのは、日本のみならず全世界で厳しい外出制限が行われ、舞台芸術公演がことごとく中止になった 5 月末だった。応募書類を出したときには、新型コロナ禍はあと数ヶ月すれば収まるに違いない、新型コロナによって数ヶ月のあいだ活動停止を余儀なくされた舞台芸術の再開を翌年の 2 月ないし 3 月に現地で取材することは可能だろうと楽観的に考えていた。ところが新型コロナ禍は終息することはなく、舞台芸術に限らず、あらゆる社会活動は翌年も翌々年も大きな制限を被ることになった。2020 年の秋頃から、細々と恐る恐る舞台公演は始まっていたが、私が取材を予定していたケベック州内で開催される舞台芸術フェスティバルや芸術見

本市はことごとく中止・延期ないしオンライン開催となった。結局、私が小畑ケベック研究奨励賞を使ってケベックに行くのは、応募から 2 年 9 ヶ月後の 2023 年 2 月まで持ち越されることになった。ケベックに行くのはこれが二回目だった。前に行ったのは 2013 年の夏なのでほぼ 10 年ぶりということになる。

2 週間の滞在期間で現代のケベックの舞台芸術の動向を効率的に概観するために、まずケベック市で毎年 2 月にこ行われている舞台芸術の見本市、RIDEAU を取材し、そのあとモンREALに移動して演劇関係者を取材することにした。RIDEAU のことは、ケベック州政府在日事務所の久山友紀さんから教えてもらい、見本市の参加登録についても便宜を図って頂いた。

渡航にはエア・カナダを使った。行きは成田発モンREAL経由でケベックまで、帰りはモンREALからトロントの便とトロントから成田までの便を利用した。ケベックで二週間の滞在を終えたあと、トロントに 4 泊してから日本に戻ったのだ。現地では 20 泊したが、今回の滞在ではどの都市でも民泊、Air BnB を利用した。

RIDEAU は、演劇、音楽、サーカスなどのさまざまな上演芸術のアーティストが参加する芸術見本市で、今年が第 35 回目となる。参加するアーティストとプロデューサー、劇場関係者のほとんどはフランス語話者で、おそらくその 8 割はケベック州で活動する人たちだ。ケベック・ローカルの芸

術見本市という枠組みのなかで、演劇のみならず、音楽やサーカスの公演やプレゼンテーションを見ることができたし、アーティストのみならず、プロデューサーや劇場主などスペクタクルの制作に関わる人たちと交流を持つことができたのがよかった。ケベック市では RIDEAU の他、ロベール・ルパージュが芸術監督を務め、ユニークで先進的なプログラムを組む地域劇場、Le Diamant のスタッフにインタビュー取材を行い、新型コロナ以降の劇場の状況、劇場の運営、今後の劇場の活動計画などについて話を聞いた。また RIDEAU のメイン会場のすぐそばにあった国際ケベック学会事務局にも挨拶に行った。

2 月 17 日 (金) にケベックから鉄道でモンREALに移動した。モンREALでは UQAM の演劇科の教授であるアントワヌ・ラプリーズさんに会い、彼の演劇実技のゼミの様子を見学させて貰った。彼に会うのは 10 年ぶりだった。ラプリーズさんは 2013 年の 6 月から 12 月までの半年間、アーティスト・イン・レジデンスで日本に人形劇の劇作家・演出家として滞在していた。この年の秋に来日していた韓国系のケベックの作家、オーク・チョンの講演会が早稲田大学であり、そこで私はラプリーズ氏と知り合った。彼の日本滞在中は何回か一緒に演劇を見に行ったりしていた。この他、モンREALでは久山さんの紹介でケベック劇作家センターを取材したり、国際演劇批評家協会の前事務局長のミシェル・ヴァイ

ス氏を訪ねたり、ケベックを代表する演劇批評誌 JEU の編集部を訪問したりして、ケベックおよびモンレアルの演劇の現状について取材を行った。またモンリアル滞在中には劇作家センターで薦められた二本の演劇公演を見た。ちょうどこの時期、佐々木菜緒さんもモンリアルに滞在中だったので、彼女と一昨年まで立教大学大学院にいたエティエンヌ・ローウ＝ジョバンさんと一緒に昼ご飯を食べ、食後、雪積もるモン・ロワイヤルに登った。

2 月 25 日にケベックを発ち、トロントへ移動した。トロント移動の日は、エア・カナダのトロント行きの便がすべてオーバーブックという信じがたい事態で、到着が予定より 8 時間遅れた。トロントでは中華街の真ん中、オンタリオ美術館のすぐそばにある Air BnB に滞在した。トロントでは 7 年前にニースでのフランス語教授法研修で知り合ったフランコ＝オンタリアンの友人と会い、オンタリオ州の多民族社会におけるフランス語話者の状況について興味深い話を聞いた。

「ポスト・新型コロナ禍のケベック演劇」という研究課題を掲げてケベックに行ったのだが、正直なところ、現地に行くまではケベックの演劇の状況についてはほとんど何も知らないのと同然の状態だった。ケベック州政府在日事務所の久山友紀さんの紹介などもあり、3 週間という短い期間だったが、現地で数多くの舞台関係者と会うことで、現代のケベック演劇をとらえるため

のポイントが浮かび上がってきた。ヨーロッパ、特にフランスの舞台芸術の動向の影響はあるが、ケベック特有の演劇状況として以下の 3 つを挙げることができるだろう。一つは、サーカスの特異な発達と多様性、二つ目は青少年向き演劇の重要性、そして三つ目は舞台芸術分野に限らないが、先住民による芸術活動の台頭だ。個人的には、今後、先住民演劇に特に注目し、ケベックの演劇界を追っていきたいと考えている。



Montréal レストラン St-Hubert (撮影：片山幹生)



〈小畑賞調査報告②〉：2022 年度受賞者

西川葉澄 (慶應義塾大学)

2022 年度の小畑ケベック研究奨励賞をいただき、2023 年 3 月 13 日から 2 週間、ケベックとモンリアルにおいて現代ケベック文学の現状と大学の文芸創作科との関係

を調査するフィールドワークを行った。この研究滞在はあらゆる意味で非常に刺激のかつスリリングなものとなった。

当初の計画では第 1 週目にラバル大学の文芸創作科(*création littéraire*)で授業聴講および参与観察、インタビュー等により、ケベックの活発な文芸創作の背景を調査することを予定していた。しかし 2 月 20 日に始まったラバル大学の全学ストライキのため渡航前より大幅な研究計画の変更が必要となった。UQAM (ケベック大学モンレアル校) の Daniel Chartier 先生に授業聴講および面談を急遽 1 週間前倒しの日程に変更していただけることになり安堵していたのも束の間、Chartier 先生の体調不良とゼミの休講をモンレアル到着日に受信したメールで知った。ケベックの移民文学について話を伺う予定だったが白紙になってしまった。しばらくは市内の書店をめぐり現代のケベック文学の出版状況の視察をして気を取り直した。

CRILCQ のニューズレターから情報を得て、16 日はモンレアル大学で行われた CRILCQ 主催の佐々木菜緒会員の講演会 (« Quand le Japon et le Québec se rencontrent ») に出席し、CRILCQ コーディネーターの Annie Tanguay 氏、および AJEQ 大会でもお目にかかった Pierre Nepveu 先生、また他の先生や大学院生たちと歓談、同研究所で資料収集・情報収集をすることができた。モンレアル大学の人文学図書館(BLSH)でも資料収集をした。日

本では入手しにくいケベック文学に関する多くの資料を閲覧できた。

翌週ケベックに長距離バスで移動した。良い形での終結を願っていたが、ラバル大学のストライキ続行のため参加予定の文芸創作の 3 つのゼミが全て休講のままとなった。しかし、ありがたいことに Michaël Trahan 先生の快諾で、23 日午後にはゼミの学生有志 5 名を交えてのカフェでの歓談が実現した。授業に関する質問や、文芸創作に対する学生の声を直に聞くことができた。その中には Anne-Marie Desmeules 氏という詩人としてすでにデビューしている大学院生もいた。Sophie Létourneau 先生との面談は 24 日午前中に実現した。モンレアルへの移動前の 2 時間程度だったが、主にカナダ総督賞受賞作品 *Chasse à l'homme* に関して、文芸創作に関する大学の制度やケベックの現状などについて話を伺った。ラバル大学ではフランス文学を学ぶ学生の約半数が文芸創作に関心を持ち、文芸創作科で学ぶことが作家の登竜門になっているという。また、ラバル大学の文芸創作科には移民の学生はほとんどいないこともわかった。

ケベックの AIEQ オフィスには 2 度も訪問し、Chantal Houdet 氏や Suzie Beaulieu 氏たちと懇談した。度重なる予定変更により、AIEQ 訪問の予定を数回変更していたためご迷惑をおかけしてしまったが、毎回歓迎してくださり心の支えとなった。インタビューができそうな作家や出版社を

紹介していただき、記念に AIEQ のロゴのついた *tuque* (ニット帽) や現代ケベック文学に関するいくつかの書籍をいただいた。Suzie Beaulieu 氏の仲介でウルグアイ出身の若手小説家・詩人の Lula Carballo 氏とコンタクトが取れた。24 日の夕方にモンレアル東部の書店 *la Livrerie* で詩の朗読会のイベント « *Rencontres multilingues 2023 : Paroles en danger* » に出演する彼女と会うために、長距離バスでモンレアルに戻った。満員のバスの中では、自分の一つ前の座席でケベコワーズのクーガーがサントフォワから乗ってきたメキシコ人のハンサムな若者を口説いているのが聞こえてきて (フランス語の手ほどきをしていた)、そちらに気を取られつつも、モンレアル到着前に必死で彼女の著作を読んだ。

目的の書店にたどり着き、出演前の Lula と会った。写真で見るとよりも気さくで非常に親切な方だった。彼女に頼んで選んでもらった本を全て大人買いして、書店の方からはエコバッグをもらったり、お茶をご馳走になった。また、会場では詩人でありこの会の主催者の Diane Régimbald 氏、UQAM 名誉教授で詩人でもある Louise Dupré 氏など朗読で登壇する女性詩人たちと出会った。この出会いはさらに広がり、Festival international de la littérature を主催する Michelle Corbeil 氏、作家・詩人の Dominique Robert 氏と 4 月から 5 月にかけて東京で会って話を聞くことができた。また、ケベック滞在では授業見学等が叶わ

なかったラバル大学の Alain Beaulieu 先生ともストライキ終結後に Zoom でのインタビューを快諾していただき、ご自身の作家活動や文芸創作科についての話を伺った。

今回の滞在は大学のストライキ延長などによる大幅な予定変更により、毎日のように状況と予定が変わる (Sophie Létourneau 氏の表現に従えば「逆風に逆らいながら」の) 2 週間であったが、多くの素晴らしい方々と出会い、温かいご支援に恵まれた。日本では入手しにくいケベック文学に関する資料の収集、各地の書店などでの現状の視察、文芸創作を目指す若者や書店員との対話、若手作家との交流などを経て、ケベックの現代文学に関する私の一面的な理解が少し立体的なものに変容する機会となった。また、所属する慶應義塾大学からは潮田記念基金による国外出張・渡航費補助を受給できたことで、充実したフィールドワークが可能となった。今回の研究滞在で得られた知見をさらに検討して後に研究発表や論文の形にまとめたい。

また AJEQ の小倉和子顧問からは研究計画の段階から親身なアドバイスをいただいていたが、現地での研究計画が変更につながる変更を強いられる状況において温かいご助言をいただけたことが精神的な支えとなった。この場を借りてさらにお礼申し上げたい。そして最後に小畑ケベック研究奨励賞により、このような素晴らしい機会を授かったことに対し、AJEQ の皆様に心から感謝申し上げます。



●編集後記●

前回同様の文言で恐縮ですが、本号も刊行に遅れが出てしまい、大変申し訳ありません。まずは、本号においても、多くの会員の方々にご執筆・ご寄稿にご協力いただき、心より感謝いたします。コロナ禍が鎮静化しつつある中、小畑賞受賞者の方々も実り多い調査滞在を終えられたことや、ACEQ 学会への参加報告を読ませていただきながら、時間の変化を強く感じた次第です。また、2023 年度の学会は、実施目前にしてこれまで以上に様々な変更が生じたこともあり、何とか開催にまで漕ぎつけられそうで安心しております。各委員会においても、長い期間をかけて様々な準備作業に追われている様を見ていると、これまで以上の盛会となることを祈るばかりです。会員の皆様におかれましても、これまで同様に、是非学会へのご参加や学会誌へのご寄稿をご検討いただけましたら幸いに存じます。(IH)

AJEQ ニュースレター

年 2 回発行

発行人：丹羽 卓 編集人：廣松 勲